

パネル

うスタンスであり、教団の内と外の区別を脱構築したい本パネルの主旨を突き詰めた形で行われたものと、補足しておきたい。

教祖伝生成の源泉は教祖そのものにあるが、作られた教祖伝を脱構築するのもまた教祖であるという宮本氏の指摘は、竹部氏や幡鎌の報告に通じていて、民衆宗教の特質に即しても、きわめて印象的であった。

思想としての禪

——近現代における道元の発見——

代表者 何 燕生

コメンテータ・司会 石井修道

諸仏諸祖は道得なり

——和辻哲郎の道元哲学——

ラルフ・ミュラー

和辻哲郎の『沙門道元』における出発点は、いわば道元を解放することにあつたが、それは禪宗一般を批判することによって、道元を禪宗のいわゆる「不立文字」の立場から引き離すことでもあつた。和辻が着目したのは、不立文字の「文字性」ではなく、言語を肯定的に捉えているとする道元思想の原理的な考え方そのものであると言える。そのような観点に立つて、和辻は、『正法眼蔵』には言語にふさわしい概念が存在すると主張する。それはいわゆる「道得」であり、和辻は「道得」をもつて、道元を真理を追究する・知恵を愛する人物と捉える。勿論、悟りと言語とがどのように相互に関係するかは簡単に説明できないが、道元が禪の伝統を批判し、言語を重視したことは明らかである。

和辻は『正法眼蔵』「道得」巻の冒頭の「諸仏諸祖は道得なり」という文章を次のように独自に解釈する。「この場合、彼

パネル

が仏祖を『道得する者』と呼ばずして単に道得と呼んだところに我々は深き興味を感じる。諸仏諸祖は菩提を表現せる人格である。しかるに彼は、人格なくしてあり得べからざるこの表現の中からその人格を抜き取って、ただ菩提の表現のみを独立せしめる。そうしてそれを道得と呼ぶ」と。

道元は確かに禅の「不立文字、教外別伝」という原理を批判し、言語は方便だけではなく、真の実在であると認めている。「仏教」「道得」および『正法眼蔵随門記』などをもとに、言語での表現によつて修行者の方から実在を構成することを道元が提案していると解釈できると思われる。

「道得」は言語の宗教的な範囲を指し、宇宙論的な次元を含めている。哲学の立場から言えば、道元は言語の中に第二次言語を認めている。「道得」は一般の言語と違って、コンテクストとは離れないものであつて、翻訳できない言い方でもあり、言語の形があること・遂行的であることを指している。フーコーの歴史的な分析にしたがつて言えば、「道得」はルネサンスの主体のない言語に近づいていると言える。和辻の『沙門道元』を評価すれば、道元における言語の問題は、「道得」を中心にして、正法眼蔵の哲学を説明するための手がかりとなるのではないかと考える。

無常仏性を基盤とするヒューマニズム

——道元思想から現代哲学へ——

ゲレオン・コプフ

二十世紀の日本の思想家の第一人者である西田幾多郎（一八七〇—一九四五）は、後世自らの哲学的見解を明らかにする際によく仏教の伝統を引き合いに出した。実際のところ、彼における仏教經典の解釈と引用の仕方は、彼の思想の展開に興味深さを際立たせている。系統だった「不二」の理論としての西田哲学を編成しようと試みている間、彼の経歴の全体にわたつて彼の哲学体系の礎となる基本概念の枠組みがしばしば変化を見せた。

つまり、一九一一年に公判された『善の研究』のなかで、西田は自らの哲学体系を「純粹經驗」の觀念に基づくものとして「純粹經驗」という觀念を原理的ににおける弱点として不満に思う点について、西田は一九一七年の「絶対意思」、一九二五年の「場所」、一九三三年の「一般的弁証法」のように、ヨハン・ゴットフリープ・フイヒテ、プラトール、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルなどの理想主義に同調した一連の専門用語で代替した。後期に、彼はそれらの代わりに、彼の独自の新語句である一九三七年の「行為的直観」、一九三九年の「絶対矛盾的自己同一」を不二二元論の基本的な原理として利用し始めた。一九三九年以降、彼はしばしば不二